



太陽の子

さいたま市立常盤小学校だより
令和5年12月号(第9号)
令和5年12月1日発行

【学校教育目標】

心身ともに健康で 思いやりの心もち 主体的に学ぶ常盤っ子の育成

喜んで登校 満足して下校

【めざす児童像】

- よく考える子
- 思いやりのある子
- たくましい子
- かかわりあいを大切にする子

満面の笑み

校長 三島 公夫

「日つまる」は冬の日が短いことを表す季語です。日暮れの早さや師走の風景が目には浮かびます。一つの言葉から様々なシーンが連想できるのは、日本語の美しさですね。

夕方の職員室、体育の授業について話し合っている教員たちがいます。「子どもは本当にその運動をやりたいと思っているのかなあ。」とか、「教師が『この運動をしてみましよう』と指示するからやっているに過ぎないのでは？」などと議論しています。他の学年の教室では、教員が教師役と子ども役になって模擬授業をしていました。「この授業の流れで、子どもはどのように考えるのだろうか?」、「子どもに思考を促すには、材料となる資料が不足しているね。」など、こちらも議論が白熱しています。

私は興味津々にその様子を見ていました。事務室や給食室では、学校全体の経費や施設、給食の献立のことで打ち合わせをしている職員もいます。教職員たちはあまりに熱中して時間が経つのを忘れてしまうようなので、「外はもう暗くなっているよ。続きは明日にしたら?」と声をかけたほどです。

本校では、11月22日(水)に研究発表会を開催しました。2年2組の根岸志瑞香教諭が体育科の授業を、4年3組の菅野史孝教諭が社会科の授業を公開し、さいたま市内だけでなく、広く県内の指導主事や教員に参観していただきました。本校の研究テーマは「本気の学び」。教職員は昨年度から2年間にわたって「本気の学び」について考え、授業実践を積み重ねてきました。私たちが目指す「本気の学び」とは、教師に「さあ、考えてみよう。」と指示されたから考えるのではなく、気が付いたら子どもたちはいつの間にかそのことについて考えていた、というスタイルの学びです。

根岸教諭らは、「2年生の子どもに、なぜ、マット遊びなのか?」とそもそも論から追究を始めました。菅野教諭らは、休日に秩父に出掛けたり、秩父夜祭の保存会の方に取材をしたりするなど、素材そのものについての調査から取り組みました。研究発表会当日の45分の授業に向けて、45時間、いや45日分の時間をかけて準備しました。皆で「どうしたら子どもの意識に寄り添った授業になるのだろうか?」と悩み抜きました。目指す授業像が定まらずに、試行錯誤が続く日々もありました。そのような時には「本気の学び」に向けて、教えることや学ぶことの楽しさを追究する職業的野心が、教員の気持ちを支えました。研究発表会が終わった夜、一日の仕事を終えた人たちで満席の洒落た店内では、二人の授業者の満面の笑みが一番輝いていました。

さて、冒頭の教職員たちの話の続きです。いつになっても帰ろうとしないので、「目の前の仕事は逃げないけれど、君たちの大切な人やことは逃げていってしまうよ。いい加減にしてもう帰りなさい。」と注意しました。すると、彼ら彼女らは「大好きな常盤小の子どもたちの笑顔のためですから!」とニコッと笑って、教材や帳簿を持って教室・執務室へ行ってしまいました……。

気が付けば今年も残すところ1か月。学校運営協議会委員長の速川芙佐子さんが、4年生の子どもたちに「十二日まち」についてお話していただきました。「福をかき込む」との意味がある縁起物の熊手の話に思わず頷く子どもたち。ここにも「本気の学び」の1コマがありました。招福を願いつつ、皆さま、どうぞよいお年をお迎えください。